

# 一粒の真珠

小川未明

青空文庫



ある町まちにたいそう上手じょうずな医者いしやが住すんでいました。けれど、この人ひとはけちんぼうで、金持かねもちでなければ、機嫌きげんよく見みてくれぬというふうでありましたから、貧乏びんぼう人は、めつたにかかることができませんでした。

それは、雪ゆきまじりの風かぜの吹ふく、寒さむい寒さむい晩ばんのことです。

「こんな晩ばんは、早はやく戸とを閉しめたがいい。たとえ呼よびにきても、金か持もちの家いえからでなければ、留る守すだといつて、断ことわつてしまえ。」と  
いいつけて、医者いしやは、早はやくから暖あたたかな床とこの中なかへ入はいつてしまいま  
した。

ちようど、その夜よのことでした。この町まちから二里りばかり離はなれた、

さびしい村むらに、貧しい暮くらしをしている勇吉ゆうきちの家いえでは、母親ははおやの病びようき氣きが募つるばかりなので、孝行こうこうの少年しょうねん、勇吉ゆうきちは、どうしていいかわからず、おどおどしていました。父ちちは、彼かれが三つばかりのとき、戦争せんそうに出でて死しんでしまったのです。その後のちは、母ははと二人ふたりで、さびしく暮くらしていました。母ははが、野菜やさいを町まちへ売うりにいく手助てだすけをしたり、鶏にわとりの世話せわをしたりして、母ははの力ちからとなつていました。

ふたり二人ふたりが、達者たっしやのうちはは、まだどうにかして、その日ひを送おくることもできたが、母親ははおやが病びようき氣きになると、もうどうすることもできなかつたのでした。さいわい、近所きんじよの人ひとたちが、しんせつでありましたから、朝あさ、晩ばん、きては、よくみまってくれました。

「勇坊、きようは、お母さんはどんなあんばいだな？」と、いつてくれるものもあれば、

「お米でも、塩でも、私たちの家にあるものなら、なんでもいつておくれ。」と、いつてくれるおかみさんたちもありました。

しかし、母親の病気だけは、いまは売薬ぐらいではなおりそうではなかつたのです。

「これは、お医者にかけてなければなるまい。」と、近所のひと々も口には出さぬが、頭をかしげていました。

「お母さん、苦しい？」と、勇吉は、母親のまくらもとにつききりで、気をもんでいましたが、なんと思つたか、急に立ち上がつて、

「僕、お医者さまを迎えにいつてくる！」といいました。

「勇坊、町からきてもらうには、すぐにお金があるのだ。それも、すこしの金でないのです、私たちも、こうして思案しているのだ。」と、一人の老人がいいますと、

「それに、あの町の医者ときたら、評判のけちんぼうということだからな。」と、いうものもありました。

「僕、なんといつても、お母さんを助けなければならん。無理にも迎えにいつて、つれてくるよ。」と、勇吉は、はや提燈に火をつけて、家を飛び出しました。外は真っ暗で、ただ、ヒュウヒュウという、吹雪のすさぶ音がするばかりでした。

勇吉は、暗い野道を提燈の火を頼りに、町へ向かって、

小さい足で、急ぎますと、冷たい雪が顔にかかり、またえりもとへ入り込みました。けれど、彼は、ただ母親の身を案ずるので心がいっぱいであつて、他のことはなにも感じなかつたのであります。

ふと、ピチャピチャという、ぬかるみを歩いてくるわらじの音が耳に入ったので、彼はびっくりして顔を上げますと、目の前へ、白い着物を着て、つえをついた一人の男が立っていました。勇吉は、怖ろしいということも忘れて、じつとかさの下の顔を見ますと、黒いひげが生えていて、目が光っていました。

「おお子供、この夜中に、ひとりでどこへいく？」と、男は、姿に似ず、やさしくたずねたのでした。

勇吉は、そのようすつきで、旅をするお坊さんか、行者  
であろうと思いましたが、自分は母親が病氣なので、これ  
から町へお医者さまを迎えに行くのだということをお話しました。

すると、だまって話をきいていた男は、

「おまえが、これから迎えに行く医者は、ただいったのでは、と  
てもきてはくれまい。この珠をやるからと頼んでみるがいい。」  
と、頸にかけていた数珠をはずして、その中から一粒の  
珠を抜いて、少年の手に渡したのであります。

勇吉は、この思いがけない恵みに、どんなに勇気づいたであ  
りましょう。頭を下げてお礼をいうとすぐさま駈け出したのであ  
りました。



トン、トンと、彼は閉まっている医者いしやの家の戸いえとをたたきました。  
 「いま時分じぶん、どこからか？」といつて、取り次ぎとは、眠ねむそうな目めをこすりながら、戸とを開あけて、のぞきました。

「もう先生せんせいは、お休みやすになつたからだめだ。」と、勇吉ゆうきちを見みて、情なさけなく断ことわりました。

このとき、勇吉ゆうきちは、一粒ひとつぶのぴかぴか光ひかる、小さな珠たまを出だして、これをどうか先生せんせいに見みせてお願ねがいもうしてくれと頼たのみました。取り次ぎとは、ぶつぶついいながら奥おくへ入はいると、まもなく医者いしやが、玄関げんかんへ飛とび出だしてきて、

「この真珠しんじゆの珠たまには見覚みおぼえがあるが、だれからもらつた？」と、ききました。

勇吉は、ここへくるまでの、あつたこと、見たことを、すべて物語りました。

「それは、たしかに私の兄だ！ 私が悪かったばかりに、十年前にこの町から、いなくなってしまったのだ。」と、いって、医者をはじめ目がさめたように、これまでの自分の行いを後悔しました。

「私は、これから、貧しい人たちのためにつくそう……。」  
 こういって、医者は、さつそく車を呼んで、その車に勇吉もともに乗せて、さびしい村へと走らせたのです。そのとき、勇吉は、心の中で、

「ああ、お母さんは助かった。」と、深く、深く神さまに感謝

して  
いま  
した。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「一粒《ひとつぶ》の真珠《しんじゆ》」  
なっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一粒の真珠

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>